

氏名・(本籍地)	中島由美(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第56号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	亜欧堂田善の名所図 —西洋的視線でみた江戸—
論文審査委員	主査 シャウマン・ヴェルナー 副査 伊藤淑子 副査 司馬春英

中島由美氏 学位請求論文審査報告書

「亜欧堂田善の名所図 —西洋的視線でみた江戸—」

論文の内容の要旨

本論文は「亜欧堂田善の名所図—西洋的視線で見た江戸」と題し、文化文政年間に活躍した洋風画家亜欧堂田善(1748-1822)の銅版画名所図を分析・解釈し、亜欧堂という名前が示すとおり西洋と東洋を結んだ田善の業績を考察する。

第一章で中島さんは、自分の研究の位置づけのため田善についての、少数ながら存在する明治以来の先行研究を調べる。従来、田善は、銅版画の優れた技法と緻密な描写に優れた技術者としてのみ認められていた。「亜欧堂田善の銅版画江戸名所図群に関する絵画史的検討」(金子信久1997)にも取り上げられてはいるが、ここでも職人的画家と軽視され、司馬江漢ほどの評価をまだ得てはいない。江戸・東京研究としてはさらに陣内秀信、黒川紀章、大谷幸夫の都市論がここで紹介される。本論文の方法論は元来の美術史研究、および比較文化研究に応用されたロラン・バルトの記号論的都市論とケヴィン・リンチの都市のイメージ論に基づくものである。

第二章において、亜欧堂田善自らは自作品に関して言及しないため、松平定信がその技能を認めた田善の蘭学者との関係を述べ、田善の西洋的な思考を推理する。まずは田善の風景画の基礎となる西洋的な視線を培った銅版画技術の習得と西洋銅版画の模写・模刻を取り上げる。田善は元来、教養のさほど高くない技術者であったが、目と手の仕事によって西洋の解剖書を研究した後、さらに谷文晁にも師事して知識と技法を高めた。

第三章では、先行研究を生かして、田善が描いた江戸の景観を考察する。中島さんは田善の名所図をひとつの都市論としてみなし、その特徴を裏付けるため、17世紀半ばごろから始まり、歴史とともに変わる江戸の名所に関するディスクールを紹介する。そして、浮世絵の名所図、特に『江戸名所図会』と、銅版画の先駆者で田善に深い影響を及ぼした司馬江漢の名所図を分析し、田善の時にすでに実証的で科学的

な名所観が芽生えたと指摘する。

松平定信の引き立てで秋田を出、11年間江戸に住んだ田善は解剖図など仕事の傍らに、司馬江漢と同じように江戸の名所を描くようになったのであったが、江漢の作品の模刻もある。第四章は本論文の中心で、中島さんはケヴィン・リンチによる都市のイメージの五つの構成要素を用いつつ、亜欧堂田善の四十種以上の名所図を分析・解釈する。イタリアのルネッサンスに始まった透視図法という光学的な遠近法は、田善がその背景の思想をおそらくは理解しないままであれ、西洋的な江戸を写すことを可能にした。西洋画から取り入れ、江戸の風景として描いた種々のモチーフはその絵の西洋趣味を増し、また透視図法と解剖学に学んだ身体の厳密な描写、銅版画の精密性により、田善の絵は写真のような一瞬の記録となる。一方、リーディングの書物から知っていたオランダの絵画に見られる庶民の描写が田善の庶民的な視線を養ったと中島さんは論ずる。

亜欧堂田善は職人的な技術者でありながら西洋的な技法と思考を持ち、伝統的な美意識にこだわらず、名所図会の定型を破り、自分で見た、感じた景色を名所として描いた。田善の個性的な名所観は逆に彼の作品に対する当時の観者の違和感を説明する。以上が本論文の結論であり、田善の比較文化の視点からの新しい評価である。

審査結果の要旨

中島さんは本論文の第一章において、亜欧堂田善に関する先行研究を満遍なく考察し、研究の位置づけのために陣内秀信、黒川紀章、大谷幸夫の都市論を紹介する。方法論として亜欧堂田善の江戸名所図の「読み」に応用したのは、ロラン・バルトの記号論と特にケヴィン・リンチの都市のイメージ論である。これは本論文の独創性を生み出した新しい観点である。

第二章において、江戸時代のわずかな記録を利用し、田善が蘭学と特に秋田蘭画の世界との関係を論ずる。従来の技術論を利用し、まずは田善の銅版画の特徴を明らかにする。さらに、田善に深い影響を及ぼした西洋解剖図を原文で読むため、中島さんはオランダ語も勉強した。医学まで視野を広げ、田善の解剖図をその名所図の解釈に応用したことによって、従来の見方とは異なる、田善の業績の評価をなし得た。

第三章を書くに際して中島さんは東京に残る江戸の名所を訪ねたり、江戸時代の名所記を読図したりして、その景観を記した。名所の描写である名所記を時代別に紹介し、時代とともに変遷する名所の定義も明らかにした。本章はほとんど先行研究に頼るが、浮世絵と司馬江漢の江戸名所図の解釈はただ田善の名所図の特徴を強調するためのものである、問題ではない。

第四章においてまずは、技術論を用いて、田善の名所図の種類を説明する。ケヴィン・リンチの都市のイメージ論を独創的に田善の名所図の分析と解釈に応用し、蘭学者のオランダ趣味による田善の西洋的な江戸イメージを明らかにしたのは本論文の最大の長所である。従来の美術史研究に最新のヴィジュアル・カルチャー研究の要素を付け加えた。時々イメージと実体の区別が文章中で怪しくなっているが、口述試験でその問題を解明できた。

膨大な一次資料、二次資料、洋書と雑誌論文などの量は、仕事をしながら論文に取り組んだ中島さんの熱心さとまじめさの証である。

修士課程の時からあらゆる方向から蘭学を研究してきた中島さんは、この幅広い知識を本論文の亜欧堂田善研究に当てはめたといえる。明治以来、田善についての言及はあるが、そのほとんどは「優れた技術者、二流の画家」程度の批評あるいは紹介である。中島さんはそれに対して比較文化学の視点から、従来

の技法論を生かしながら、現在の都市論と江戸時代の名所のディスケールを用い、江戸に西洋的な視線をもたらした田善を、国際性を持つ画家として見直している。そのために田善の、江戸の風景と風俗を描いた四十種以上の銅版画名所図を厳密に分析と解釈し、それによって、田善が西洋と東洋を結ぶ媒体として持つ意義を指摘することができた。

中島さんの論文は最近盛んに行われている江戸研究や視覚表現研究に属す。比較文化学の視点からは顧みられることのなかったテーマを見つけたことは評価に値する。また、資料を集めるために全国の美術館と博物館を当たった努力と田善を研究する学芸員等を尋ねたり、議論したり熱心さも高く買いたい。

以上本論文の長点・弱点について述べてきた。審査委員会は本論文を精読の後、口述試験を行い、論文のいくつかの問題点をも解明しえた。その結果として、本論文が博士の学位授与に値するものと認めたことを、ここに報告する。